

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月28日現在

機関番号：11101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21730393

研究課題名（和文） 戦後日本における兵役経験者の職業経歴形成に関する社会学的研究

研究課題名（英文） A Sociological study on formation process of career of the people experienced in military service duty in Postwar Japan

研究代表者

高瀬 雅弘 (TAKASE MASAHIRO)

弘前大学・教育学部・准教授

研究者番号：20447113

研究成果の概要（和文）：

本研究は、戦前期から戦後期の日本において、兵役によって断絶した職業キャリアの再形成過程をひとつの「移行」として捉え、それに対する諸政策と社会関係資本それぞれの意義を検証したものである。戦後の開拓政策の分析と開拓地をフィールドとした聞き取り調査を通して、戦後の社会変動のなかでの「移行」において、軍隊や満州開拓といった戦前・戦時を貫く共通体験に基づいた人的ネットワークや共同性が重要な役割を果たしたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This research examines the significances of policies and social capital for the re-formation process of the vocational career severed by military service duty, regarding it as a form of “transition” in prewar and postwar Japan. Analysis of exploitation policies and life-history interviews in the clearances show the social capital such as a human network and cooperation based on common experiences in an army and the Manchuria exploitation played an important role for “transition” in social changes in postwar Japan.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：社会学、ライフコース、労働市場、兵役、職業紹介、職業経歴、戦後開拓

## 1. 研究開始当初の背景

兵役が職業経歴に及ぼす影響を把握する試みは、これまで社会学におけるライフコース研究を中心に進められてきた。池岡(1987)の研究は、個人のライフコースにおける兵役経験の影響を分析したものである。そこでは

(1)成人期への移行と兵役の重なりが生じた際の影響、(2)戦争経験によって生じたライフコース上の危機とその対処に関する回顧的な意味づけ、といった知見が示されている。

男子の職業キャリアの安定化という観点からは、大久保(1987)や安藤(1998)の研

究が、ライフコース上の歴史時間と職業経歴の重なりのもつ意味について、さらに職業移動研究における原(1979)、盛山他(1990)の研究が職業経歴を規定する要因についてそれぞれ明らかにしてきた。

これらの研究はそれぞれ重要な知見を提示しているものの、職業経歴を形成、再形成するうえでどのような社会的アクターが介在したのかについては分析しえていない。終戦時に大量に発生した労働人口が、どのような経緯で労働市場に吸収されていったのかについては、朝鮮戦争による特需や戦後復興といったマクロな要因に基づいて説明されるだけであり、実際に職業経歴が形成(再形成)されていく過程に関する研究は十分に展開されないまま、今日に至っている。

それゆえに、第一に、研究視角の問題として、徴兵年齢以前の10代における職業経歴が、戦前から戦時期を生きた人々のライフコースにとって、とりわけ熟練形成や生活構造といった点についていかなる意味をもっていたのかについての考察が捨象されることとなった。第二に、方法上の問題として、個々のライフコースを対象とした社会移動研究などの実証分析と、戦後労働政策に関する文書資料やインフォーマルな人的つながり(軍隊時代に培われた人間関係など)についての分析とが、相互に接合されることがなかったために、個人の職業経歴とその形成を促したものをトータルな視点で分析するうえでの制約を抱えている。第三に、兵役経験がライフコースにもたらした影響に関するインテンシブな調査研究は、主として大都市部とその周辺を対象に行われ、農村地域についてはほとんど行われていないのが現状である。

以上のような状況をかんがみ、これまで個別に分析されてきた資料群の関連づけを行いながら、兵役経験者の職業経歴の形成過程を丹念に再構成することにより、既存の研究の限界を打開することを指向するに至った。

## 2. 研究の目的

本研究は、従来の社会学・経済学などの研究において見落とされてきた、兵役経験による職業キャリアの断絶と再形成、そこでの社会的選抜やリンケージといった側面に注目し、次の三つの視点から、労働市場研究ならびにライフコース研究の新たなフィールドを切り拓こうとするものである。

第一に、青年期における、兵役を挟んだ職業のマクロ構造の変化を量的な趨勢から分析する。これまでも、兵役によるキャリアの分断についての研究はなされてきたが、徴兵年齢期に第二次大戦を迎えた世代と、彼らに先行する世代との比較分析といったものは十分に行われることがなかった。戦前期の青少年労働市場に関する高瀬(2000)におい

ては、1920年代においてすでに10代における職業経歴の「行き詰まり」といった問題が存在していたことが指摘されている。そうしたキャリアの断絶というものが、マクロレベルでどの程度存在していたのかを把握する。

第二に、大量に発生した復員者に対応するための労働政策・支援策の形成過程を、中央の労働行政、地方行政それぞれの視点から分析する。兵役を終えた人々に対する職業斡旋の問題は、管見の限りにおいて1930年代からすでに議論されていたことが資料から確認されるが、そうした固有の対策が戦後においてどのように展開したのかについては、労働省(1969)などにおいてわずかに言及されているに過ぎない。また、旧軍用地などを利用しての開拓といった施策についても、ほとんど明らかにされないままになっている。本研究では、そうした一連の諸施策が、どの程度の有効性をもっていたのか(あるいはもたなかったのか)について、実証的に明らかにする。

第三に、第二の点で検討されるような、行政による職業経歴の形成プロセスとは異なる、インフォーマルな人的つながりの果たした役割について検討する。これまでに実施した聞き取り調査においては、兵役以前とは異なる職業に就いた人々の就業過程において、軍隊時代に培ったネットワークが重要な意味をもったことがエピソード的に語られている。グラノヴェッター(1974=1998)が指摘したような、労働者と職業が結びつく際のリンケージについて、いくつかのフィールドを設定したうえで聞き取り調査などを通じて分析する。

このような作業を通じて、戦後のライフコースにおける職業経歴と、労働行政や人的ネットワークの相互的な影響関係のありようを明らかにする。

## 【引用・参照文献】

- ・安藤由美, 1998, 「職業キャリアにおける安定段階への移行タイミング」『琉球大学法文学部紀要 人間科学』2。
- ・池岡義孝, 1987, 「兵役体験とライフコース」, 森岡清美・青井和夫編『現代日本人のライフコース』, 日本学術振興会所収。
- ・大久保孝治, 1987, 「企業間移動からみた職業経歴」, 同上書所収。
- ・グラノヴェッター, M, 1974=1998, 『転職』, ミネルヴァ書房。
- ・盛山和夫他, 1990, 「職歴移動の構造」, 直井優・盛山和夫編『現代日本の階層構造1 社会階層の構造と過程』, 東京大学出版会所収。
- ・高瀬雅弘, 2000, 「『勤労青少年』をめぐ

る社会秩序の編成過程」、『教育社会学研究』第67集。

- ・原純輔, 1979, 「職業経歴の分析」, 富永健一編『日本の階層構造』, 東京大学出版会所収。
- ・労働省, 1969, 『労働行政史』, 労働省。

### 3. 研究の方法

#### (1) 先行研究の収集と検討

戦後日本人のライフコース、社会移動、労働史、社会政策史領域での、兵役経験、軍隊における資格や技能形成、恩給制度に関する先行研究を網羅的に収集し、批判的に検討した。加えて日本における労働市場研究の成果をふまえ、とくに戦後労働市場における兵役経験者とそれ以外の労働者層との共通点、ならびに相違点を整理し、本研究が既存の研究に対して提起しうる新たな視座の明確化を行なった。

兵役経験については、量的な趨勢だけでなく、1950年代に数多く刊行された岩波新書などの出版物、ルポルタージュ、戦友会などに残された回顧的な資料、日記、自伝といった質的資料についても収集を行い、軍隊組織を媒介とした人的ネットワークの位相を把握した。

#### (2) 基本的資料の収集と整理

研究の前提となるマクロな社会変動を把握するために、以下の全国レベルでのデータ・資料の収集を行った。

- ①『国勢調査報告』(全国・都道府県別)などの統計資料
- ②職業資格・政策に関する諸資料(法規・通達類・各種審議会資料など)
- ③兵役経験者の雇用問題等に関する単行本・雑誌記事

#### (3) 資料・データ収集調査

研究期間において、以下の資料収集調査を実施した(括弧内は資料所蔵機関の所在地を表す)。

- ①兵役経験者の就職問題に関する資料(東京都)
- ②労働行政・労働保護に関する資料(東京都)
- ③戦後日本人のライフコースに関する諸調査資料(東京都)
- ④戦後開拓地に関する統計・新聞資料(東京都・札幌市・青森市・盛岡市)

#### (4) 生活史調査

戦後緊急開拓の時期に青森県黒石市厚目内地区に入植した人々、同時期に同県鱈ヶ沢町旧山田野演習場跡地に入植した旧軍隊関係者、および岩手県滝沢村に長野県旧上郷村からの分村により入植した人々を対象に開

き取り調査を実施した。いずれのフィールドにおいても戦前から戦後を通じての職業経歴の形成過程について、ライフヒストリー・インタビューという形での調査を実施した。

#### (5) 収集資料の整理と分析

(3)および(4)の調査で収集した資料について、内容ごとに分類・整理を行ったうえで、大きく分けて以下の4つの分析を行った。

- ①復員者の就職問題に関する調査資料・言説の内容分析
- ②「緊急開拓実施要領」を嚆矢とする戦後開拓政策の内容分析とそれらの施策に関する言説分析
- ③1940年代後半から50年代にかけて実施された戦後開拓地調査・関連統計資料の再分析
- ④戦後開拓地への入植者の職業経歴を中心としたライフコース分析

### 4. 研究成果

本研究は、戦後日本社会におけるライフコースの変容を、兵役という歴史的・個人的イベントに注目し、就労や生活形成における政策や人的ネットワークがもたらした影響を分析することにより明らかにしようとした。

具体的には、以下のような点が明らかになった。

#### (1) 戦前・戦時期からの「課題」の継承

対象を昭和戦前期にまで遡って資料収集を行った結果、規模こそ大きく異なるものの兵役経験者のその後の職業問題が、戦前期から戦後期を通底する構造をもっていることを明らかにした。ここでの知見は以下の2点にまとめられる。

ひとつは、兵役後の職業経歴をどのように再形成するかという課題の連続性である。1931年4月公布・同年11月施行の「入営者職業保証法」を、戦前期・戦時期において青少年の職業経歴に「断絶」をもたらした兵役と職業との関係のひとつの結節点として位置づけた。本研究では、この法律の制定過程を公文書資料に基づいて分析し、先行研究において論じられてきた一般成人の「失業問題」への対処という側面だけでなく、比較的若い世代、すなわち青少年の「移行問題」への対応という意義づけを行った。

もうひとつは、政策と入植者の属性という両面からみた場合、双方において旧秩序が維持される形で戦後開拓が行われていたということである。1945年11月に公布・施行された「緊急開拓実施要領」については、先行研究において政策としての戦前・戦時期からの連続性が指摘されている。このことをふまえたうえで、戦後開拓が、戦前からの旧秩序を維持した形で進められたことを、入植者の

属性という側面から明らかにした。そのひとつの典型として、本研究では元軍人を取り上げた。聞き取り調査によって明らかになった元軍人入植者たちの姿は、戦時と戦後の連続／不連続の位相を考えるうえでの手がかりになると考える。インフラや社会関係資本の連続性と、職業経歴や周囲からの視線の不連続性といったものが複雑に絡み合うなかで、かつての軍人たちがどのように戦後を生き抜いていったのか（あるいはいけなかったのか）を明らかにすることは、戦後の日本社会の構造を考えるうえでひとつの重要な視座になりうると考える。

## (2) 過渡的な「移行問題」の位相

本研究では、戦後開拓を職業経歴の再構築のための方途として位置づけ、これを「移行」（トランジション）の視点から読み解いていくことを課題とした。先行研究においては、開拓地への入植を包摂と排除という視点から捉えているが、そうした視点の重要性をふまえつつ、一方で入植に際しての選択的な要素にも注目した。そのうえで、「移行問題」としての戦後開拓について、次の2つの形で性格づけを行った。

ひとつは、戦後において新たな開拓地へと入植するという若者の選択が、職業選択という観点からみた場合、時代の過渡性を端的に象徴するものであったということである。10代後半から20代前半という年齢で入植した若者たちは、もう少し生まれる年代が遅ければ、「集団就職」の時代のなかで、都市の商工業労働市場へと吸収されていったであろう。その意味において、戦後開拓地への入植は、ある世代特有の「移行」体験である。そこには、1920年代から整備された少年職業紹介や職業指導といった施策も、また1950年代に制度化されていく学校から職業へという移行システムも介在することはなかったのである。

もうひとつは、公的な職業斡旋システムが機能し得ない「移行」場面において、実質的な媒介役を担ったのは、旧軍隊といった組織であったということである。「緊急開拓要領」に先駆けて動き出した旧陸軍による開拓の動きは、終戦前の逼迫した食料状況のもとでの農地開拓営団の事業の延長線上に位置づけられるものであった。物資が窮乏するなかで、相当な資源を有していた軍と、そこに属していた元軍人たちが、入植においても優位な地位にあり、さらに旧軍隊という組織が戦後においても社会関係資本の淵源となっていたことを明らかにした。大規模な復員や引き揚げが進められる過程において、当時の地方新聞の記事分析や限られた事例の聞き取りから、旧軍隊が「移行」に果たした役割をトータルに評価することは現時点では困難

であるが、この課題についてより詳細な分析を進めていくことは、戦争の「後始末」がどのように行われたのかについて考察することへとつながる。

## (3) 共同体の役割と移行のタイミング

職業経歴の再形成の場としての戦後開拓地は、多様な性格をもっている。慣れない農作業に見切りをつけ、離農・都市移住者を多く生みだした開拓地もあれば、経営に成功して、現在も引き続き存続している開拓地も存在する。その点で戦後開拓を一義的に評価するのは困難である。

そうした前提に立ったうえで、本研究では旧満州での開拓や兵役に従事した経験を持ち、戦後に長野県から岩手県へと分村開拓者として入植し、現在もその地で生活を営み続けている人々を対象に、彼らの開拓地での「大人」へのなり方のプロセスを検証した。

この開拓地は、戦後開拓地のなかでも希有な成功事例として位置づけられる。その要因は、母村から長期間にわたって行われた継続的支援、入植者たちの農業から酪農への転換といった経営面での先見性、彼らの熱心さといったものに求められる。しかしそれらの要因に加えて、この開拓地のもつ2つの特性に注目した。

ひとつは、入植した若者たちの共同性である。彼らは入植当時、ほぼ同世代の単身者がほとんどであり、そこでは共同経営・共同生活というものを必要とした。さらに彼らは異郷の地にあって、同郷という地縁的結合を有しており、さほど年齢の違いないリーダーを中心としてまとまりを形作っていった。リーダーは満州での開拓を経験しており、そこでの経営のスキルが当地の開拓においても反映された。こうした特性は、今日に至るまで離脱者がきわめて少なく、経営が継続していることの要因となっている。そこでは単にリーダーのリーダーシップのみが重要な意味をもつわけではなく、フォロワーたちとの関係性も大きく影響している。

もうひとつは、共同経営から個人経営への移行がスムーズに行われたことである。10代後半から20代前半で入植した若者たちは、20代後半から30代になろうとする時点でそれぞれ独立することになった。その際には、それまでの共同性をゆるやかな形で維持するような対応や、個人経営を見越したタイミングでの生殖家族の形成によって、独立にともなうリスクが抑制された。これらによってライフコースの基盤の安定が図られた。すなわち家族経歴上の移行と職業経歴上の移行とがタイミングを合わせる形で行われたことがきわめて重要な意味をもったと考えられる。

戦後において新たにクローズアップされ

た「農村過剰人口問題」のなかで、その問題の中心としてまなざされた若者たちは、戦争によって職業経歴を形成し始めたばかりの時期にその断絶を余儀なくされた存在でもある。彼らは様々な形で自らのライフコースやキャリアを（再）構築しようとした。彼らの職業経歴の（再）形成が相対的にうまくいったと考えられるのは、上記の要因によって「移行」が成功したことによると考えられる。

通説的な解釈では、終戦によって戦時体制は解体し、労働市場の形成は新たな（戦後的な）秩序のもとで形成されたことになる。しかしながら、兵役経験者の職業経歴の再形成において、軍隊組織のネットワークや満州開拓といった経験に基づく（擬似）地縁的な結合が意味をもっていたとすれば、単純な戦前／戦中／戦後といった時代区分は相対化されることになる。そうした歴史過程からライフコースを捉えようとする点において、本研究はこれまでの研究に対してオリジナルなものであると位置づけることができる。

今後、世代的に兵役経験者が減少していくなかで、その体験を語りとして記録する作業は喫緊の課題である。一方で回顧録や日記など、個人資料の収集・整理といった作業の重要性がより高まっていくと考えられる。

同時に、本研究を進めていくなかで浮かび上がった新たな課題は、再構築された職業経歴が、「家業」となっていた場合の「継承問題」である。本研究が調査フィールドとした戦後開拓地における世代間継承の問題は、本研究の分析対象である個人の経歴を、家族の経歴のなかに位置づける必要性を喚起するものであり、この点についても今後フィールド調査によってより深く分析していく予定である。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- ① 高瀬雅弘、「戦後開拓地のライフヒストリー(2)―岩手上郷分村開拓における若者たちの職業経歴の再構築過程―」、弘前大学教育学部紀要、査読無、107号、2012、pp.15-27、<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/handle/10129/4572>
- ② 高瀬雅弘、「書評 石岡学著『「教育」としての職業指導の成立』―戦前日本の学校と移行問題―」、日本労働研究雑誌、査読無、53巻11号、2011、pp.99-102
- ③ 高瀬雅弘、書評「石岡学著、『「教育」としての職業指導の成立 戦前日本の学校と移行問題』」、教育学研究、査読無、78巻3号、2011、pp.276-278、[http://ci.nii.ac.jp/els/110008750060.pdf?id=ART0009824569&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1337495555&cp=](http://ci.nii.ac.jp/els/110008750060.pdf?id=ART0009824569&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1337495555&cp=)

としての職業指導の成立 戦前日本の学校と移行問題』」、教育学研究、査読無、78巻3号、2011、pp.276-278、[http://ci.nii.ac.jp/els/110008750060.pdf?id=ART0009824569&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1337495555&cp=](http://ci.nii.ac.jp/els/110008750060.pdf?id=ART0009824569&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1337495555&cp=)

- ④ 高瀬雅弘、村上亜弥、「戦後開拓地のライフヒストリー(1)―青森県鱒ヶ沢町山田野地区における「緊急開拓」の事例―」、弘前大学教育学部紀要、査読無、105号、2010、pp.33-45、<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/handle/10129/4447>
- ⑤ 高瀬雅弘、「戦間期日本の青年期構造：都市社会化による変容に注目して」、弘前大学教育学部紀要、査読無、103号、2010、pp.17-30、<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/handle/10129/3391>

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

高瀬 雅弘 (TAKASE MASAHIRO)  
弘前大学・教育学部・准教授  
研究者番号：20447113

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

